

ゼニタナゴ 保全活動



ゼニタナゴ
環境省 絶滅危惧IA



塩曳潟

ゼニタナゴは日本固有の種で、現在では本県を始めとする数県にのみ生息する希少種です。環境省と秋田県では、絶滅の危険性が最も高い種に指定しています。大森山動物園では、平成15年に園内にある沼塩曳潟で、ゼニタナゴの生息を確認して以来、その保全に取り組んでいます。最近の活動をご紹介します。



シンポジウムの様子

ゼニタナゴ・シンポジウム

ゼニタナゴの保全活動の一環として、平成20年6月29日、ゼニタナゴの生態と保全のあり方や自然との共存などについて考えていただくことを目的に、「ゼニタナゴ・シンポジウム」を開催しました。

シンポジウム冒頭の基調講演では、社団法人観音崎自然博物館研究員の北村淳一さんから、貝に卵を産み付ける貴重な映像を交えながらタナゴ類の生態解説をしていただきました。また、秋田淡水魚研究会代表の杉山秀樹さんからは、ゼニタナゴが存在する意義と、それを公開しながら保全し、次代へつなぐ取り組みについて紹介していただきました。

後半のパネルディスカッションでは、両氏に元秋田県鳥獣保護センター所長の泉祐一さんが加わり、当園の小松守園長をコーディネーターとして、それぞれの立場から発言していただきました。

ゼニタナゴ保護池の活動

大森山動物園にある塩曳潟にも、近年、侵略的外来生物のアメリカザリガニが入り込んでいます。これは塩曳潟にすむ生き物にとって大きな脅威です。事実、平成15年の水生物調査では、ゼニタナゴが産卵する小さなドブガイがあまり見つかりませんでした。ザリガニが小さな貝を掘り起こしたり、食べてしまったためと考えられます。寿命が1年~2年と短く、また、母貝の中で卵から稚魚まで、約8ヶ月もの長い期間を過ごすゼニタナゴにとって、産卵床であり、安全なゆりかごでもある母貝の消滅は致命的です。



タナゴとドブガイ

大森山動物園では、平成18年、日本動物園水族

館協会の野生動物保護基金により、ゼニタナゴの保護池を造り、ゼニタナゴと母貝となるドブガイも併せて隔離して保護することにしました。保全活動を指導していただいている、秋田淡水魚研究会代表の杉山秀樹さんによると、貝の中の卵と稚魚になってからの一定期間を守ってやることで、自然界に戻した後の親魚への成育率が高まるようです。



ゼニタナゴの保護池

館協会の野生動物保護基金により、ゼニタナゴの保護池を造り、ゼニタナゴと母貝となるドブガイも併せて隔離して保護することにしました。保全活動を指導していただいている、秋田淡水魚研究会代表の杉山秀樹さんによると、貝の中の卵と稚魚になってからの一定期間を守ってやることで、自然界に戻した後の親魚への成育率が高まるようです。



マーキングしたタナゴ



繁殖したドブガイ

この保護池には、平成19年春に塩曳潟で捕獲した稚魚約280尾を放流し、育成しました。秋になって、育った稚魚100尾に印をつけて塩曳潟に再放流しましたが、まだ幼いタナゴたちが、本来の場所に向けて一斉に泳ぎ出す様子は、感動的でした。また、保護池の底から、その年生まれとみられる小さなドブガイもみつき、保護池の母貝を保護する機能を確認する



稚魚の群れ



子どもたちとの活動

こともできました。さらに、今年の春には、初めて保護池生まれの稚魚を500尾以上も確保することに成功しました。

ゼニタナゴの保全には、個体数の安定的な確保と外敵の排除が必要です。現在は保護池での増殖に加え、市民や地域の子どもの手も借りながら、アメリカザリガニの駆除にも取り組んでいます。根絶は困難ですが、その影響を少しでも低減したいとの思いで実施しています。

塩曳潟は自然界の タイムカプセル

塩曳潟では、ゼニタナゴのほか、同じく絶滅危惧種の淡水魚、シナイモツゴやアカヒレタビラの生息も確認されています。絶滅危惧種の存在は、自然度のバロメーターともいえます。他の地域では消えつつある自然が、塩曳潟には残っているのです。塩曳潟は、いわば自然界のタイムカプセルなのかもしれません。

ゼニタナゴの保全は、大げさではなく、地域の自然環境や生物多様性の保全につながる活動です。その期待と共に、責任も大きいのですが、我々が受け継いだ貴重な自然を、次代へ繋ぐために努力していきたいと考えています。



シナイモツゴ
環境省 絶滅危惧IA



アカヒレタビラ
環境省 絶滅危惧IB